

理想に向かって 自覚的な人生を

生物生産学部長 三國 英賢

卒業生、修了生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは今、広島大学（生物生産学部）で学んだ知識をこれからの人生に活かそうと張り切っていることと思う。その気持ちを大切にしてください。

皆さんの卒業する一九九七年は、年明けからペルー日本大使館での人質事件、株価の暴落、ロシアタンカーの重油流出事故など、重苦しいことが起こっている。

私たちが取り巻く社会環境は不確実で不透明なことが多く、皆さんがこれから進んで行く道も、順風満帆とはいかないことを示している。人間らしく、創造的に生きようとする前に立ちふさがる社会環境は、皆さんの意欲や理想をねじ歪めるかもしれない。しかし、人間の歴史は人間の意思とは無関係に勝手に進むものではなく、人間によって左右され、造り上げられるものである。

「知は力なり」というが、知の目的はそれを活かすことにある。知識は大学で学んだことに加え、これからも修得することは容易である。大変難しいことは、修得した知識を自分の生き方にどう活かして行くかということである。皆さんの進歩道はそれぞれ違っていても、自分の幸福と生き方を人類全体の幸福と結びつけ、理想に向かって個性的で自覚的な人生を送ってほしい。

大学で得たもの

藤田 明

私が大学に入学する際に一つ大きな悩みがあった。それは、体育会の陸上部に入部するかどうか、ということであった。

私自身、高校時代に陸上部に所属しており、充実した学生生活を送っていたので、大学でも陸上活動は続けたいと思っていたのだが、勉強との両立が心配であった。好きな陸上は続けたい。しかし、そのために留年することがあつては……

そんな時、生物生産学部にランニンググループがあることを知った。入学以来四年間のサークルに籍を置いていたが、このサークルで感じることは、一緒に走り続ける仲間がいることよりも、サークルとしての規律性のなさであった。

しかし、勉強の方もなんとか済ませ、就職先も決まり、卒業を間近に控える段階になつて、改めてこのサークルに入つて良かったと思つている。それは、このサークルをまたはランニングを通じて、多くのの人々と出会えたことである。ここで出会えた人々は、私の一生の宝であり、これからもこのつながりを大切にしていきたい。



フェニックス駅に参加して



瀬戸内海全域調査航海「豊潮丸」にて (右から4人目が筆者)

Never Ending Voyage

生物圏科学研究科博士課程前期 妹背 秀和

私は今、七年間の航海を終え、Hiroshima Universityという船に別れを告げる時を迎えている。今思えば、この航海は、「自分は何故に生きてゆくべきなのか」という命題に対する答えを探る「羅針盤」を見つめる目的で始めた、彷徨のような航海であった。

「大学という場所と時間の中で何を糧として、何を培い、何を成してゆくのだろうか」。それが私にはあまりにも漠然としていた。ただ、「海」に対しての憧憬にも似た向学心があっただけだった。莫大な仮説の死が沈降した「学問」という海、大学という船に乗っているからこそ出会うことのできたさまざまな「自然」、そして「人間」という海。

そんな一人の命にとって、あまりにも複雑で、巨きな海を進んでいく中で、私は生きることに厳しさとすばらしさを身体に刻んでいった。そして私は、この七年間という時間のうしろで生きることに対して、希望というペクトルを指し示す「羅針盤」を得ることができた。私には、まだ見ぬ海が遙かに広がっている。

大学生生活を振り返って

生物圏科学研究科博士課程後期 湊 明義

私の大学生活は研究室配属を境に二つに大別される。

研究室に入る前の三年間は、バイトや遊びなどに時間を費やし、なんとなく過ごしていた。研究室に入ってから、学会や就職活動を通じて多くの人と話す機会を持つことができた、いろいろな意味で多くの刺激を受けた。

その中で、情報(知識)を得ることが重要なことだと思つた。他の大学、特に関東の大学では、研究において他大学、研究機関との交流があり、自分の研究分野や異なる分野の情報を得やすい環境にあることを実感した。また、外国に行つたときには、日本のことについて聞かれても、普段は何気ないことでもよく理解していないことがあつることがわかつた。

今思えば、学部の三年間に自分の専門でない領域の勉強をもう少しやっておけばよかったと思つている。これからは、もっと貪欲に情報を得るために、国内外を問わず外出の機会を増やし、多くの人と仕事だけでなく、社会問題、文化、世間話など多岐にわたってコミュニケーションを楽しみたいと考えている。また、私自身にとって刺激を受ける人々に数多く出会いたい。



ブルージュ(ベルギー)にて(左端が筆者)

アジアの友と仕事を

大学院国際協力研究科長 山下 彰一

昨今、行政改革や規制緩和などの掛け声が高い。その声は聞こえども、なかなか変化の兆しが見えない。役所も大学もいつく旧弊を守っている感がある。世界が大変革の最中にあるというのに、一体これだけのだろうか。

今年の元旦、日本経済新聞の第一面トップを飾ったのは、「二〇二〇年からの警鐘…日本が消える」という不気味な特集で、翌日から連載が続いた。このままでは日本が沈没するという具体的事例に加えて、アジア諸国の「日本離れ」現象が著しいことなどを生々しく伝えていた。

いずれにしても、組織や制度、価値観が変わるのは時間の問題だろう。日本の政治や経済の構造、教育や宗教観など、どの分野をとってみても根本的な改革が必要な時期にきている。これは日本語でなんというの」というような質問が飛び交うことはもとより、日本語あるいは英語で書いたレポートの手入れまでお願いしたことも珍しくない。今になって考えると、自分の心許ない日本語でもなんとか一連の試験をクリアしてきたのは、メンバーたちとの交流に負うところが大きいといえよう。

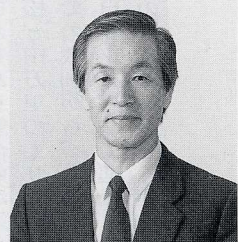
その後、日常生活の話題がだんだん多くなつて、「結婚おめでとう」とか、「就職活動で大変だね」とかいうような場面もあつた。卒業が近づくと、研究室のパソコンの利用も忙しくなる中、みんな互いの便利を図って譲り合う気持ちもあつたと思う。

研究室のメンバーたちと「さよなら」をいう時期にきているが、みなさんにはこれからそれぞれの職場での活躍を期待している。

われわれの研究室は何よりもまず言葉の勉強の場であつた。四か国(日韓豪中)からのメンバー構成で、



アビチャイ先生(タイ)の送別会。鏡山公園にて(本人前列右から2人目)



期にきている。当然、今年卒業し、修了する諸君は、真つ先にその洗礼を受けることになる。

満ち足りた社会で少々傲慢に育つた諸君が、この荒波を乗り切ることが出来るか。長い間、アジア諸国の学生たちの猛烈な勉強ぶりや社会に対する前向きな姿勢を見てきた私には、日本の若者に展望があるようには思えない。しかし、君たちは既成の考え方や組織に囚われない自由な発想を持っている。これが君たちの強みだと思つし、君たちに対する私の期待でもある。

三年前にスタートしたばかりの大学院国際協力研究科の修了生には、君たちが、新しい理念の下にできた大学院の修了生であることを忘れて欲しくない。新しい領域だけに、自らの道は自分で切り開いて行くしかない。そして将来、アジアの友と一緒にぜひ新しい仕事を始めて欲しい。

コラム



高等教育セミナーに参加して(二)

「今日の高等教育の有り様にはいささか失望を禁じ得ない」。飯島元学長の講話は、このショッキングな一言で始まった。飯島氏と言えば、筆者など近現代史を専攻する者にとつて忘れられないのは、今堀誠二元広島大学総合科学部長(故人)等との共編『広島・長崎の原爆災害』であり、また大学紛争期の知る者にとつてその采配振りは一つの伝説にもなっている。従つて、病理学方面の泰斗として、また大学人としても一家言を有する氏のその冒頭発言は、誠にもって聴衆を虜にする魔力に満ちていたが、提起の内容も重量感に溢れ、かつ辛辣さに貫かれていた。

「大学のモデルとは中世ヨーロッパのギルドに他ならない。従つてキリスト教会・国家等の影響下たるは必定なれど、人間のオートノミー(自主性・自律性)が重視されたことも事実である。各機関にはディグリー(学位)授与権が認められ、これについては他からの干渉を受けえない。大学の自治機構たる由縁がそこにある……」。



講話中の飯島宗一氏

「そもそも文部省がアメリカに範を採り、大学設置審議会を置いた目的とは第一義的には大学の質的向上を目指すというものであり、設置基準大綱化の意図も軌を一にするものに他ならない。私が関与した臨教審第四部会的主眼も、従来の過度な規制を緩和することに置かれていた。にも関わらず、今日わが国の自己点検の実情はどうか……」

飯島氏の予期せぬ「大学論」も、ここで一挙に現実へと引き戻された。「上意順応至上主義」や「バスに乗り遅れるな思想」の蔓延など、氏の不満は、わが国の大学が本来行使すべき自治権を放棄しているに等しいとの認識に立つものであるが、同時に日本社会への現実批判とも解され、今日大学が有する非特殊性を再確認させられた。(続) 広島大学調査室 橋本 学(はしもと・まなぶ)